

隠岐島の考古地理的概観

田 中 豊 治

(一) 論 点

隠岐島における考古学的研究は大正の初期に島内の神職を中心として調査がすすめられ、古墳時代を中心として石器時代に及ぶ資料が蒐集せられ、知夫郡西の島町焼火神社宮司の松浦静麿氏によって整理された。その結果は日本石器時代遺物発見地名表(第五版)に掲げられている。昭和に入り、島内の教員、特に藤田一枝、田邑二枝の両兄弟によって系統的な調査がすすめられ莫大な資料が両氏の私宅に所蔵されるにいたった。第二次大戦後にいたり両氏の蒐集品を基礎にして島根大学の山本助教、関西大学の末永博士、国学院大学の大場博士等の研究がすすめられた。その研究結果は遠からず発表になると思われるが現在未刊である。なお隠岐高校を中心とする隠岐郷土研究会の古墳分布の調査は十数年に亘って綿密に進められ現在にいたっている。

本文においては主として遺跡の分布を中心として隠岐島の考古学上の問題点を検討して見る事にする。

(二) 黒耀石産地としての隠岐

隠岐の先史時代の遺跡は現在の知識では縄文前期までさかのぼり得る、藤田、田邑両氏の蒐集品を中心にして隠岐における先史編年を作製して見ると第一表の如くなる。本表は藤田氏試案を山本、末永両教授が検討し、その確認

第一表に示した隠岐の縄文遺跡は後述する如く多数の黒耀石の石器を包含している。石器時代の利器の素材黒耀石の産地は北海道の十勝地方、信州和田峠、九州阿蘇、姫島、箱根、隠岐があげられている。元来この石はアルカリ石英粗面岩（流紋岩と通称されている）の溶岩が噴出する時に爆発的な噴火の場合に瞬間的な冷却によって生成されるもので山陰地方においては隠岐以外にこの岩石の分布はない。隠岐にあつては島後の西半分がこの流紋岩の被覆地域であるが、黒耀石生成要因たる爆発的な噴火をなした地域は爆裂火口の跡である都万村の油井の池のマールと五箇村の中畑、福浦、代、久見等の西北島後と西郷町の東南隅の津井地区である。これ等の地域では流紋岩質の凝灰岩層の中に黒耀石がはさまれていて大小さまざまな形態で産出する。五箇村福浦の黒崖は黒耀石の断崖（Obsidian cliff）である。津井の池東部の断崖には黒耀石が帯状になつて狭まれた露出が大規模にあらわれている。倭、山陰地方の黒耀石の供給源は何所であつたか、距離的には隠岐がもっとも近い位置にあり、本土との交通が一日行程以内の帆走可能な地域（八〇軒）であるので山陰地方の黒耀石の供給地域は隠岐と考えてよいと思う。而して山陰各地に縄文遺跡があつて、隠岐にないという事程不合理な話はないはずである。この疑問は西郷町宮尾地区を初めとし、第一表に掲げた地区の縄文遺跡の発見によって続々解決して来たのである。

(二) 宮尾遺跡

昭和二十二年、藤田一枝発見、石皿、敲石、石匙、石斧、石鏃、石錘等の石器多数。敲石には中の凹み不明瞭、石鏃は正三角形のものが主である。土器は大型深鉢形で口縁部から底部にいたる線が直線的で、底部は全部円底である。器紋は条痕紋と竹管紋、貝殻紋、鋸齒状紋、瓜形紋が主である。すなわち縄文前期の特色を有する。現地は西郷



第一図 西郷湾頭の縄文遺跡

湾内の浅海に面した丘陵斜面であるが海岸が自然的並に人工的に侵蝕変形せられているので今後浅海底の渚附近を精査すれば尚若干の遺物発見が可能と思われる。

(四) 荒尾、岩井津

石器は官尾と同型のものが多いが土器は大部変化して、器形は曲線が多くなり、丸味を帯び、底部は平底となる。瓜紋は僅かで縄文が主となる。羽状縄文があらわれる。縄文中期と推定する。

(五) くだりま

岬の玄武岩台地の北部、飯の山北部の珪藻土丘陵に相対する地域の海岸で石器は前二地区と同様のものを産するが土器の出土は僅かである。無紋のものが割合多く含まれている。後期、晩期と推定する。

(六) 湊

島後北端の西郷町中村湊地区より西村地区にいたる大峯山の東北麓丘陵地帯、昭和二十九年に農道設置の時発見。昭和三十一年以来関大の末永博士発掘調査し、近く研究報告刊行のはず、晩期遺跡と目されている。

(七) 郡 山

郡山は島前海土村の諏訪湾に面する内海丘陵地帯で遺跡は田邑二枝氏の発見、後期から晩期に位する土器を産する。

(八) 断片的石器、土器出土地

第一は西郷湾東岸の金峯山麓—津井にいたる海岸で石器出土。第二は重栖湾周辺、この地区は五箇村小学校から北方にいたる地域で石器が断片的に発見されている。第三は今津で石器が出ている。第四は島後東端の布施小学校近辺で、石器の発見があるが前地域同様極めて量的に僅少である。

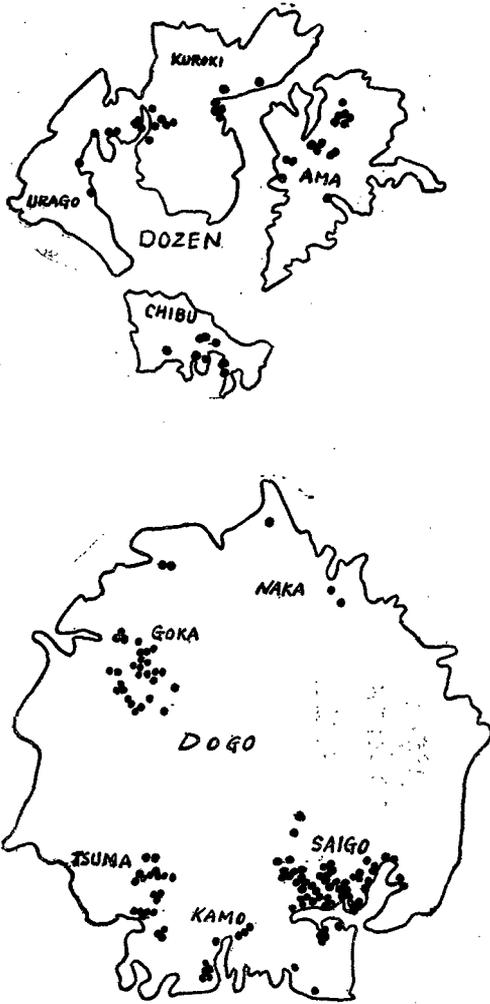
尚、隠岐島後の西部は前述の如く流紋岩の被覆地域であるから当然いたる所に黒耀石の産出が見られる。従って石鏃類の断片は処々に散布しているので従来しばしば不用意に石鏃、石匙等の判定が行われた傾向があるので今後の研究には注意する必要がある。

(九) 古墳分布

隠岐においては遺跡分布上弥生武文化の遺跡は極めて不明瞭で縄文文化から直ちに古墳文化に移行して行ったのではないかと疑われている程である。西郷湾西部から下西地区にかけての地区と海土村郡山地域では弥生式土器かと思われるものの発見もあつたが確認にいたっていない。

古墳の分布は戦後隠岐高校郷土班の活動と隠岐郷土研究会が昭和三十年來、地区毎に連続的に行つた分布調査で略その大略は判明した。昭和三十七年五月、筆者は島根県教育委員会より隠岐島の古墳分布の報告を求められたので従來の個別的発見を一つ一つ現地について調査し確認した。その結果を集約すると第二図の示すような結果となる。

島前地区の分布……島前は玄武岩の鎔岩台地で水田は海土中部低地地区と黒木の中部低地地区に開ける外は一〇〇米内外の高度を有する丘陵地で現在は「牧畑」に利用されている草原地域である。海土、黒木の古墳は水田地に臨む台地面上に立地しているが浦郷、知夫は水田の極めてすくない地域で、古墳の立地も海辺近く、或は丘陵の頂上部と言つた地区で内地の古墳の立地とはいささか趣を異にする。浦郷の内地に面する珍崎、赤之江の古墳、知夫の古墳は



第二図
隠岐における古墳の分布(1点)基を示す

恐らくは農耕生活者のものでなく漁業生活者のそれではないかと思われる。知夫の最西地区に位する俗称「猫ヶ岩屋」古墳は溶岩台地面に位置し、現在の集落からは三軒はなれた孤立的位置にあり、その成立事情については如何なる要因が主となったものか興味ある課題を内包している。古墳の形態をみると知夫八基古墳のうち横穴古墳四、円墳四、出土品は祝部土器を主としている。土師器は見られない。浦郷地区の古墳は全部横穴である。黒木地区では十二基のうち七基横穴、五基円墳である。海土地地区の水田地帯の古墳は円墳が主で横穴は外海に面する御波古墳と北部丘返地区の二、三の古墳に限られている。

島後地区の古墳は図によって明らかな如く大体四集団に別れている。西郷地区、五箇地区、都万地区、加茂地区のそれである。

西郷地区の古墳の立地は八尾川沖積平野に臨む台地面上に分布するものがその大部をしめ円墳が主である。前方後円は明瞭なもの四基を算する。平神社古墳、子安神社古墳、二宮神社古墳、玉芳酢神社西部古墳である。現在いずれも古墳の位置に神社が存在している。平神社古墳は現在隠岐で発見されている古墳中最大のもので長径五十米を算し、後円部の高さは約五米である。本古墳は隠岐高校郷土クラブ生徒によって発見せられ平板測量も行われた。前方部から円筒埴輪が発見されている。ちなみに隠岐の古墳は未発掘のものが大部分であるが、現在まで埴輪の発見せられたのは本古墳のみである。

西郷湾南岸のくだりま地区の古墳は全部横穴古墳で硅藻土の丘陵を掘って作製されている。分布図には四基のみ示したが実数は二十基をこえている。現在鉱業会社によって硅藻土は工業用原料として採掘されているので古墳は次々と消滅しつつある。この古墳中最大の横穴の内部にはアザラシと見られる動物と名称不明の魚類と漁網、女体と思わ

れる人物が刻まれていて西田直二郎博士の日本文化史に早くから紹介されている。戦後この壁画の大半は脱落し、現在はその痕跡を残すのみである。横穴立地地域は西郷湾に面する入江の奥で飯の山の山腹にあるので島民は「飯の山古墳」と称している。附近には水田は存在せず玄武岩の溶岩台地が直ちに海にせまっているので恐らく漁業生活者の古墳であろうと思われる。

加茂地区の古墳は殆ど円墳で加茂湾の突端にある船島の古墳は流紋岩の山脚の稜線上に列状をなし分布している。この古墳群は末永博士によって発掘研究されている。

都万の古墳は立地上面白く分布を示している。流紋岩の鎔岩性の山地の裾に第三紀層の頁岩の丘陵が分布し、古墳はこの丘陵の斜面には横穴、平坦面上には円墳が立地し、海岸より横穴地区、円墳地区、横穴地区、円墳地区と交互に地形の変化に従って分布する。

五箇地区の古墳は主として重栖川の沖積平野に臨む丘陵地帯に分布し、北方の第三紀層の頁岩地区には横穴が集団的に分布する。美々津の丘陵面には集団的に円墳が分布している。那から苗代田にいたる二〇〇米の山地の稜線上には円墳が分布している。

中地区には現在の所三基、久見には二基程の円墳が発見されている。隠岐全島の古墳の分布を図化して見て大観的には西郷地区が最も高密度の分布を示している事が読みとれる。これについて五箇、都万となる。現在の集落、耕地の分布から見ると、五箇、都万間の沿海地帯には那久、油井、福浦等の水田地帯もあり、それぞれ集落が発達して経済力も充実しているが、古墳分布上から見るとかなり精査して見たが一基も発見せられていない。又、西郷、五箇地区はそれぞれ八尾、重栖の両河川の沖積平野を後背地として発達した農業地域でその下流部には集団的に古墳分布

は認められるがその立地の限界は海岸より四杆以内の地区に限られている。特に八尾川流域の場合現在の水田地域は沿岸沖積平野が連続し十二杆にわたって帯状に発達しているにもかかわらず、沿海三杆以内の地区にしか存在しない。すなわち、隠岐の古墳は沿海的な分布を示していると言う事が出来る。

更に古墳成立の時期を検討してみると横穴は古墳後期の特色を示し、円墳も現在までの発掘調査の結果判明した所ではこれまた後期のものである。しかも出土品が土器の場合は祝部土器が絶対多量をしめ、土師器の出土は久見古墳を除いては極めてすくない。且つ、埴輪の発見されたのは平神社の前方後円墳一基のみであり、しかもその質は粗雑である。

隠岐島の古墳が島内の生産力の拡大に伴って生じた在地豪族のものであるとしてもそれは本土における場合のように段階を追って逐次に充実した地域経済の充実発展に伴って行なわれたと言うことは疑わしい。何故なら殆どすべての古墳が後期のもので立地的にも必ずしも農業生産地域と一致せず、祝部土器を主とする本土（恐らく雲伯地域）文化の移入の形態を取ったものと思われるからである。

朝鮮本土からの大陸文化が隠岐に直接足跡を印した証拠は現在までの考古学的遺跡からは皆無である。現在予想される歴史的推定は七世紀から八世紀にいたる律令体制の整備に伴って隠岐が折からの大陸関係の国防の前線地として大和朝廷に重視され、それらの政治的軍事的重要性から急激に発展し、島民自らの力でなく、外部の政治的経済的刺戟によって成立して行った隠岐の在地勢力の表現として、本土の影響をうけて古墳の成立が七、八世紀に行なわれたのではないかと筆者は考えている。

(H) 八世紀前後の隱岐

古墳の分布と共に隱岐の考古学的遺跡として看過出来ないものに「条里遺制」「古寺社」がある。前者について、筆者は昭和三十一年五月号の地理学評論で若干ふれた事があるが確認出来る条里遺制として五方村北方地区と西郷町下西地区がある。北方地区の地割図は慶長十八年の北方村御検地絵図帳によるもので縦、横四米に及ぶ大絵図で現在五ヶ地北方金坂亮氏の所蔵によるものである。



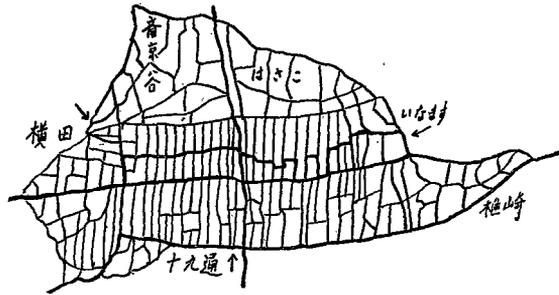
第三図 北方村地割(慶長18年)

この地区は美々津古墳群と北方横穴古墳群の前面に拡がる重栖川下流の水田地区である。現在は近世の耕地整理によって更に整備された地割となっているが旧地割が基本となっている。更にもう一つの条里遺跡は西郷町地区内の下西、平、池田間の水田地帯で地籍名では横田、十九通、稲益の地区がこれに当る。第四図は現在の地割を示したものである。この地区は隱岐国府と隱岐国分寺の中間にあたり、隱岐島最大の水田地帯にあたり、条里施行が実施されたとすれば当然その中心となるべき地区である。筆者は役場の地籍図を精査しこの地区の地割を確認し、地名上も五反田、坪等の呼称を確認して

いる。もっと広い地区に亘って当然分布が存在すべきであるが、八尾川の洪水によって他の地区は消滅したと考えるのが妥当である。これは現地に残る旧河道、自然堤防等から理論的に証明出来る事実である。

隱岐における古寺社については既に国分寺は礎石が現存し、布目瓦の出土もありその位置は確認され、更に尼寺は

神龜元年
 天平三年
 天平十四年
 天平十七年
 天平宝字六年
 天平宝字七年



第四図 西郷町下西の条理遺制

定諸配流遠近之程、伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐六国為遠。
 天地所祝、豊年は好……隱岐之國租……成免除之。
 配流名草直高根女於隱岐國。
 制諸國公廨……隱岐國三万束。
 下逆朝臣黑麻呂為隱岐守。
 板振鎌束……転自渤海相隨帰朝……漂流十余日着隱岐國。

隱岐高校郷土班生徒の俗称尼寺原一帶の精密な調査で一九五四年八月西郷町池田野中十五、十六、十七番地区内でおびたしい布目瓦の散布地を発見した事によってその存在が確認された。(礎石の発見はまだ行われない)以上の二寺の他の西郷町下西の俗称ゴントクジ、五箇村郡のゴンガジからは布目瓦、蓮弁のある鏡瓦が発見され特にゴントクジの位置には礎石が九基発見されている。(瓦は隱岐高校に保存されている)この二寺については記録的には何等よるべきものはないが恐らく八世紀に建立された寺院と思われる。

当時の隱岐の歴史的意義は島内の史料において求むべくなく、六國史等によっても積極的な地域像は推定出来ない。試に六國史より摘記しても次の程度である。

天平宝字二年 蝗損禾稼。

和銅元年 隱岐國霖雨大風、遣使賑恤之。

養老五年 隱岐隸出雲按察使。

天平宝字八年

新坤勝伝首京師……独第六子刷雄……免其死而流隱岐国。

船親王配流隱岐国。

(下略)

殆んど配流の記事と賑恤の記事である。

しかるに側面的資料、例えば出雲風土記等によると隱岐の持つ史的位置はかなりはつきりとその特色を浮ぼりされて来る。そのもっとも著しい性格は隱岐の持つ本土防衛の前線基地の役目である。天平四年八月に大和朝廷は新羅防衛の為に山陰道節度使を任命し、石見、隱岐、出雲、伯耆の四国に動員令を下した。天平六年の出雲国計合帳に見える節度使の符によると同年二月出雲国と隱岐とに烽を置いた事が見え、翌年三月両国の烽はそれぞれ時日を定めて連絡の調査をせしめている。

出雲風土記には防備体制が細かく記述されているが隱岐における様子は何等資料なく不明である。

しかし類聚三代格に記す寛平六年九月十九日の隱岐国解には隱岐と本土の連絡を迅速ならしめるため烽の充実を朝廷に要請している記事があるので隱岐が前線基地として自らも意識し、又中央政府によつてもそのように重視されているようである。延暦以後しばしば六国史に隱岐の国防記事が登場して来る。例えば大同四年に国府役人の増員、承和から天慶年間にかけて隱岐の諸神社に対する度々の贈位は新羅に対する国防関係の緊張によるもので神助を願つての事である。

更に隱岐の国防関係の記事は六国史にしばしばあらわれる。例えば、

貞觀七年——新羅賊兵、常窺間隙、宜令能登、因幡……隱岐……班幣於邑境諸神以祈鎮護之殊効。

貞觀九年五月——造八幡四天王像五鋪、各一鋪、下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等国……建立仁祠、安置尊像、諸国令寺及郡

内練行精進僧四口、各当像前依最勝王経、四天王護国品……。

貞観十一年——置弩師一員

貞観十二年——下知因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐等修守禦之具焉。

同年——写鼓吹司陣法式一通 賜隠岐国宰、申請也。

貞観十五年——兵革成変……石見、隠岐、……戒嚴兵卒、備之不虞。

元慶二年——同因幡……隠岐……諸国、調習人兵、修繕器械、戒懼斥使、固護要害、……帰依神仏、亦須境内群神班幣、於四天

王像前、修調伏法……。

天慶三年——隠岐国言上、兵庫震動。

(下略)

このような記事は天慶五年までしばしばあらわれて来る。

八世紀より十世紀にかけての隠岐が中央政府の印象に強く映じたのは配流地として国防前線であったのである。

尚、隠岐国式内社十六座のうち大四座、小十二座で大のしめる比重が大である。山陰各地の例では出雲国八七座大二座、因幡国五十座大一座、石見国三四座大なし、伯耆国六座大なしである。隠岐の大四座は六国史の記事からみると全く国防上の靈験によって大に列せられたのである。

以上筆者は隠岐が古代において如何なる歴史的位置を国史上において占めていたかを検討した。隠岐の古墳の成立もこのような歴史的環境を度外視しては考えられない。

併、最後にかかる歴史的環境の中において隠岐に古墳を成立せしめた豪族とは一体如何なる氏族であったらうか、筆者はこれを探尋する手がかりとして隠岐国正税帳に掲げられた官人の氏名を重視したい。

隠岐に関する具体的な歴史的文献は正倉院文書、天平四年の隠岐国正税帳である。沢田吾一氏の文献的研究「奈良

時代民政経済の数的研究」によつて既に研究されているが、筆者は隠岐島史の資料として昭和三十三年に宮内省に依頼し、正倉院のマイクロフィルムより全文写真複製資料を与えられたのもっとも確実な調査をすることが出来た。

先ず智夫郡（現在利夫郡と書く）の部の最後に「郡司 大領外正八位上勳十二等、海部諸石、主帳外大初位上勳十二等 服部在馬」とあり、海部郡（現在海士郡と書く）の条には「郡司、小領外従八位下 阿曇三雄」とあり、周吉郡（現周吉郡）の条には「郡司、大領外正八位上勳十二等 大私直真継」とあり、役道郡（現穩地郡……役道は伊未自と訓じてあるのでイミチと訓む）の条には「郡司、大領外従八位上、大伴部大倉、小領外従八位下勳十二等 磯部直万得」とあり、隠岐島在地の勢力者の出自がよみとれる。この氏名で注目すべき事は「海部・阿曇・磯部」であらう。これ等はいずれも海人族であるからである。律令制施行と共に在地の豪族が郡司として任用された事は国史の示すところである。しかりとせば隠岐の在地の豪族のよつて立つた生産の地盤は何であつたらうか、勿論農耕時代になつての弥生期以降は水田耕作が主体であつたのは当然である。しかしながらその農耕民族の出自は正税帳に示される氏姓から明らかのように漁業者であつたと推定するのが正当であらう。

(十一) 結 び

隠岐の古代史は資料の面から全く未開のままである。近年考古学者の来島調査があつたがまだその結果は未発表である。かりに発表になつても恐らくは個々の発掘調査報告が主体となるものと予想せられる。このような時に在地の筆者達が僅かな資料からたどりついた一つの仮説的研究が以上のべたところである。本篇は形式のととのつた論文のタイプをとらず、一つの事項から次の事項を関連的におしすすめて一つの仮定をなした文章である。今後隠岐は国立

公園の指定と相俟って来島者が急増すると思う。専門的な立場で隠岐島の古代史を追求する研究者のために本文が何等かの足がかりとなれば幸である。尚本文の記事は今後の研究者によって当然修正改変せらるべきものであり、特に春秋に富んだ研究者が筆者の仮定を一つ一つ事実に基づいて改訂して正しい隠岐の古代史をきつきあげてくれることを祈ってペンをおく。